

キャリアデザイン学部

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

キャリアデザイン学部では2003年度の設置以来、継続的かつ積極的に課題の把握につとめ対応・解決にあたっており、高く評価できる。「キャリア研究調査法入門」(2017年度から)や「キャリア体験国際(台湾)」(2018年度から)を設置するなど、学部の理念や目的に合致した体系的で順次的な教育課程の整備が年々進んでいる。学生の受け入れに関しても、指定校や特別入試を含めた制度の検討が提起されており、受験生の減少という大きな流れの中で、時宜を得たものである。

今後は授業時間以外の学習時間(予習・復習)の確保、シラバスと授業内容の照合、個々の授業における成績評価や単位認定の適切性の検証、転・編入者および社会人特別入試による入学者の、他大学等における既修得単位の認定基準の策定など、教育課程と学習成果に関してさらなる適切性を目指すことが望まれる。

なお「インターンシップ」と就職・採用活動との関係は文科省の「インターンシップの更なる充実に向けて議論のとりまとめ」(2017年)でも検討すべき課題とされており、キャリアデザイン学部として積極的かつ現実的な提言を行うなど、全学を牽引することを期待したい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

大学評価委員会から特段の改善意見は提出されておらず、引き続き適切な学部運営により、教育研究の質の維持・向上に努めることとする。現行の教育課程については、質保証の観点からの点検を継続的に進め、必要に応じて改善を図る。指摘された教育課程と学習成果に関する適切性の向上については教務委員会及び内部質保証委員会が中心となって、体験学習、調査法、入門系科目、語学などの科目授業についての成績評価や単位認定について検討を行っている。またシラバスと授業内容の照合についても、教務委員会が中心となって、シラバスの初校ゲラをもとに必要な項目及び内容面でのチェックを行っている。転・編入者の既修得単位の認定基準については、必要に応じて指定校教員との懇談を行っている。

インターンシップへの取り組みについては、学部内外への教育成果の発信という点から学部主催のシンポジウム(2017.11.13 テーマ「インターンの活かし方——大学と企業がいまできること」、2018.11.12 テーマ「『選択過剰時代のマッチングを考える——就職・採用活動の研究』)を開催してきており、キャリアデザイン学部として就職・採用活動について積極的かつ現実的な提言を行うように努めてきたところである。今後も全学を牽引すべくさらなる取り組みを継続していくこととしたい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

キャリアデザイン学部では、学部の理念や目的に沿い、PDCAのプロセスを念頭におきながら教育課程の整備、入試制度の改革等がなされてきており、これらの継続的活動は今後も望まれるところである。また、2018年度大学評価の総評で要望された諸点について、教務委員会・内部質保証委員会が中心となって、いくつかの共通科目に関して適正な成績評価や単位認定の検討、シラバスと授業内容の照合が行われており、それらの成果が期待される。入学者の多様化によって今後の増加がある程度見込める転・編入者、社会人特別入試による入学者などに対する適正なケア(単位認定基準の整備等)についても取り組みを始めており、具体的な策定につながることを期待したい。インターンシップへの取り組みについては手厚く、「キャリア体験事前指導」「キャリア体験学習」が併置されており、学部主催のシンポジウム等で成果を学内外に発信するなど、充実した取り組みを行ってきていることが評価できる。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

教育課程の編成・実施方針に基づき、学生の能力育成という観点から、各科目は適切な教育内容を提供できるように配置されている。とりわけ、専門教育において基幹的な位置を占める科目については、原則として専任教員が担当する体制

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

をとっている。「キャリアデザイン学入門」「3つの領域別の必修の入門科目」をはじめとする基幹科目において基礎的な理解を形成し、2年次以降の領域ごとの展開科目で専門性を深めるとともに、2年次秋学期からの「演習」において問題意識を掘り下げ、卒業論文の執筆、「キャリアデザイン学総合演習」で総括するという積み上げ型のカリキュラムとなっている。

また、本学部の特徴である選択必修科目の「展開体験」では、高校等に対するキャリア支援や企業等での実習による体験を通じて、実社会におけるキャリアデザインへの理解を深めている。

**【根拠資料】** ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・2019年度キャリアデザイン学部履修の手引き 学部 - (1) ~ (33)
- ・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」  
<http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/gakka/curriculum/index.html>

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系的を確保していますか。 S  A B

**※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。**

本学部では、教養教育と専門教育を段階的に位置づけるのではなく、相互が相乗的な効果をあげることができるように、1年次から市ヶ谷基礎科目だけではなく、専門科目を幅広く設置している。

専門科目については、1年次から履修できる「基幹科目」、2年次から履修できる「展開科目」「関連科目」、2年次秋学期から履修できる「演習」、4年次に履修できる「卒業論文」「キャリアデザイン学総合演習」を系統的に配置し、カリキュラムの順次性に配慮している。また、専門科目は、「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の3領域の科目群、および体験型学習科目に分かれ、共通→分化→統合という学習の履歴を追うことができるように設計されており、カリキュラムの体系的性が保たれている。

2012年度から実施した新カリキュラムでは、学生が自身の専門を従来よりも意識して体系的に履修することを可能にし、また2017年度より、調査法の拡充（キャリア研究調査法入門の新設）、領域別の入門科目の柔軟な履修機会の確保という観点から一部改定を行っている。

なお、「キャリア研究調査法入門」を新設し、方法論の習得に関して順次性・階梯性を改善した。

また本学部の学生が、実際に、順次性・階梯性・体系的のある履修をするためには、履修単位上限の拘束を緩和することが肝要であることから、2017年度より、教職・資格課程科目の一部を「関連科目」から除くことで、これを実施できるよう改編した。

さらに2017年度はカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーを完成させ、ディプロマポリシーに照らして各科目の配置を示し、その順次性・体系的について確認するとともに、学生に対して科目配置の考え方を明示した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度キャリアデザイン学部履修の手引き 学部 - (1) ~ (33)
- ・2018年度キャリアデザイン学部講義概要（シラバス）「キャリア研究調査法入門」 p.2
- ・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」  
<http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/gakka/curriculum/index.html>

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。 S  A B

**※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。**

市ヶ谷基礎科目と専門科目をバランスよく履修することにより、専門分野に特化した人材としてだけではなく、幅広い教養と総合的な判断力、豊かな人間性を備えた人材を育てることができるような教育課程の編成に留意している。また選択した個別領域を深く学ぶとともに、学生が領域横断的な学びを付加し幅広い専門性を修得できるようにしている。さらに、豊かな人間性涵養のためには、大学の学びの中で多様な体験をすることが重要であることから、体験型授業を必修選択とし、体験を通じて自己理解、社会への理解を深め、多様な観点から事象を把握できるような能力伸長を目指している。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度キャリアデザイン学部履修の手引き 学部 - (1) ~ (35)

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。 S  A B

**※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。**

初年次教育として、市ヶ谷基礎科目の「基礎ゼミ」「法政学への招待」「情報処理演習」、専門科目の「キャリアデザイン学入門」「3領域別のキャリアデザイン学入門」「キャリア研究調査法入門」を配置し、専門への導入として位置付けている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

高大接続への配慮については、市ヶ谷基礎科目 0 群の「基礎ゼミ」において、全クラスにおける標準シラバスと共通の評価システムの適用と共通テキストの活用により、基本的なアカデミックスキルズを修得することと並行して、高校生と大学生の学習・生活における違い、引用と剽窃の違い、電子メールの書き方・送り方、等について原則として専任教員が丁寧に指導している。

また、付属校及び指定校推薦による入学予定者に対しては、高校 3 年の 3 学期対応として課題を課しており、入学後に課題をフォローすることにより、高校から大学の学びへの円滑な移行を促している。

**【2018 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

今後のグローバル化を踏まえると、大学で語学力を高めるのは必須と考えるが、学生が必ずしも語学の学習に積極的ではないことから、執行部と学部の英語担当教員が ILAC 英語分科会執行部と魅力的な英語カリキュラムの在り方や、学生に英語の重要性を理解させることの重要性について協議を行い、その結果を教授会で共有し、様々な機会をとらえて学生に語学の重要性を訴求することを確認した。また、2018 年度入学生に対するガイダンスでは、英語のカリキュラムの説明を充実させ、語学学習の重要性を説明した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019 年度キャリアデザイン学部履修の手引き 学部 (8) ～ (12)
- ・2019 年度第 1 回 FD ミーティング (2018 年 4 月 5 日) 資料「基礎ゼミ」及び議事録
- ・2018 年度第 13 回教授会 (2018 年 12 月 22 日) 資料 18「付属校・指定校等第三学期課題」及び議事録
- ・2017 年度第 14 回教授会 (2018 年 1 月 26 日) 資料 16「CD 学部英語関連科目の現状」及び議事録
- ・新入生英語ガイダンス (2019 年 4 月 5 日)

⑤ 学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S  A B

**※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。**

学生の国際性を涵養するために、知識・体験・語学力の向上を促進する科目を置いている。第一に、展開科目において、3 つの領域ごとに「外書講読」を配置するほか、現代の国際関係に関する理論、歴史、時事、地理等の知識を学ぶ「国際関係論」「国際地域研究」「アジア社会論」を置いている。第二に、国境を越えた体験学習の機会として、「キャリア体験学習 (国際)」でベトナム、台湾、「SA」ではオーストラリア、ニュージーランドの大学と提携したプログラムを提供している。第三に、英語力の強化を目的に、2014 年度から英語強化プログラム (ERP) のコースを実施している。また、専門演習の中には、英語使用を義務づけて実施しているクラスもある。

学生の多様性の確保という観点から、2015 年度に留学生定員 10 名の枠を設定、2016 年度には従来のバカロレア入試や日本人学校指定校入試に加え、グローバル体験推薦入試を導入、2017 年度からは海外の指定校 (韓国 6 校) 入試を導入している。

**【2018 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

ILAC 必修英語に関しては、2017 年度に、クラス定員を 24 人とするよう ILAC 英語分科会/運営委員会に申し入れを行い、2018 年度から 24 名定員が実現した。

2018 年度から「キャリア体験学習 (国際)」で台湾を実施した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019 年度キャリアデザイン学部講義概要 (Web シラバス) ([https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&t\\_mode=pc&nendo=2019](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&t_mode=pc&nendo=2019))
- ・2019 年度キャリアデザイン学部履修の手引き「体験型選択必修科目/キャリア体験学習 (国際)」 学部 - (32) (33)
- ・2019 年度キャリアデザイン学部履修の手引き「スタディ・アブロード (SA) プログラムについて」 学部 - (125) (126)
- ・2020 入試ガイド
- ・キャリアデザイン学部パンフレット 2020 年度—p. 19
- ・2018 年度キャリア体験学習【国際】ベトナム報告集
- ・2018 年度キャリア体験学習 (国際・台湾) ——台湾で揺れ動いた僕らの足跡」

⑥ 学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

**※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。**

市ヶ谷基礎科目に「就業基礎力養成 I・II」を配置するとともに、専門科目では、「キャリアデザイン学入門」をはじめとして、学部の理念に基づきすべての専門科目が、キャリア教育としての効果を持つ内容となっている。また、学部の就職委員会は、履修ガイダンスにおいて学部での学びと将来の就業との関連性について説明するなど、「就活支援」という狭

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

い視点にとらわれない形でのキャリア支援の観点から活動を展開している。

**【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

就職委員会を中心に、キャリアアドバイザーの支援を受け、2018年10月～2019年3月にかけて、就職支援プログラム「就職カフェ」を開催した。就職活動の意義、業界研究の方法、自己PR作成といった就職活動を目前に控えた学生を対象とする内容だけでなく、社会人と接する機会やインターンシップの利用方法など、社会的自立および職業的自立に向けた意識形成を図った。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度キャリアデザイン学部履修の手引き 学部- (2) ～ (16)、(27) - (41)
- ・2019年度 第1回FDミーティング (2019年4月5日) 資料「就職委員会」及び議事録
- ・2019年度 第1回FDミーティング (2019年4月5日) 資料「キャリアアドバイザーの活動について」及び議事録

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S  A B

**【履修指導の体制および方法】** ※箇条書きで記入。

<1年次基礎ゼミ>

- ・授業内で、領域の選択をはじめ卒業までを見据えた履修指導を実施している。

<教務委員会関連事項>

- ・年度の開始時に、教務委員会による学年別履修ガイダンスを開催している。
- ・2年生の5月に、教務委員会によるゼミ履修ガイダンスを開催している（ゼミ所属は2年生秋学期から）。その際、就職委員会からの説明も行うことにより、働くことを見据えてゼミの重要性について考えさせるようにしている。
- ・2年生に対し、ゼミ担当教員がゼミ関連科目を示すなどして、具体的な科目履修を推奨している。

<キャリアアドバイザー運営委員会関連事項>

- ・1年生に対し、先輩学生をピアアドバイザーとする履修相談会を開催。
- ・全学年の学生に対して、随時、キャリアアドバイザーによる履修相談を行う体制が整備している。

<体験型必修科目関連事項>

- ・2年生に対し、体験型必修科目の履修ガイダンスを実施。
- ・履修ガイダンス配布資料の形式を整え、共通フォーマットによって各体験の内容を比較しやすくなった。

**【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・年度初めに体験型主任主催の体験型履修ガイダンスを開催した。その際、体験型各クラスの説明フォーマットを統一し、各クラスの選考条件やプロセスの一覧表を作成し配布した。また、体験型授業の報告書や今年度の実施内容に関する資料等を配布し、情報提供を充実させた。
- ・ゼミ履修のゼミ別応募状況を手引きで明示し、学生のゼミ希望の参考に資することとした。
- ・2018年度初めの履修説明会において、英語学習の重要性について、担当教員から説明を行った。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度 ゼミ履修の手引き
- ・2019年度 体験型選択必修科目 ガイダンス資料 (3月29日)
- ・2019年度 新入生 英語ガイダンス (4月5日)
- ・2018年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート
- ・2019年度キャリアデザイン学部履修の手引き「キャリアアドバイザーより新入生のみなさんへ」 学部 (34～41)
- ・キャリアサポート事前指導／キャリアサポート実習成果報告書 (2018年度)
- ・2018年度キャリア体験学習報告書
- ・2018年度キャリア体験学習【国際】ベトナム報告書
- ・2018年度キャリア体験学習 (国際・台湾) ——台湾で揺れ動いた僕らの足跡」
- ・地域学習支援報告書
- ・キャリアデザイン学部ホームページ <https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/> : カリキュラムツリー、カリキュラムマップ

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S  A B

※取り組み概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

学習指導は、ガイダンスや個別相談、ゼミや演習等の授業の中で適切な指導が行われるように配慮している。とりわけ1年春学期の「基礎ゼミ」は、基礎能力の育成をめざして、原則として専任教員による少人数の指導体制が組まれている。2016年度からは、全クラスの基本的なスケジュール、評価方法を基礎ゼミ代表教員が作成して授業運営の均質化を図っている。具体的には、クラスごとにある程度柔軟性を持たせるという判断から、①準拠テキストの共通化、②課題内容の統一、③口頭発表の機会の回数設定、④グループディスカッションなど学生参加型の学習形式を主として進めること、⑤成績の考え方、の5項目を共通の運用条件として、その他の部分は、サブ教材とする文献の選択を含め担当教員の自由裁量とした。2017年度はそれに加え、成績評価基準、出欠席基準の共通化を図った。また、2018年度初めには、「定期試験等における不正行為の処分基準」の内容の徹底を図るため、少人数の演習のクラスを中心に資料を配布して説明を行った。

**【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

英語スキルの重要性に鑑み、2018年度の新入生及び2年生に対する履修ガイダンスにおいて、英語カリキュラムの体系の説明、英語学習の重要性について、担当教員から丁寧な説明を行った。また、英語に関する授業の履修状況を教授会で共有し、様々な機会をとらえて各教員から英語の学びの重要性を指摘することについて確認を行った。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度キャリアデザイン学部履修の手引き「キャリアアドバイザーより新入生のみなさんへ」学部- (34) ~ (41)
- ・2019年度キャリアデザイン学部講義概要 (Web シラバス)「基礎科目 (0 群) 基礎ゼミ」  
( [https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no\\_id=1911506&nendo=2019&gakubu\\_id=リベラルアーツ&gakubueng=AX&t\\_mode=pc](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=1911506&nendo=2019&gakubu_id=リベラルアーツ&gakubueng=AX&t_mode=pc) )
- ・2018年度キャリアデザイン学部 内部質保証・自己点検チェックシート
- ・2019年度 第1回 FD ミーティング (2018年4月5日) 資料「基礎ゼミ」及び議事録
- ・2019年度 新入生 英語ガイダンス (4月5日)

③学生の学習時間 (予習・復習) を確保するための方策を行なっていますか。

S  A B

**※取り組み概要を記入。**

学生が授業時間以外にも学習時間 (予習・復習) を確保するために、シラバスにおいて自主学習の内容を提示・指示するとともに、授業時において具体的な指導を行うように努めている。特に、演習 (ゼミ) は教員の裁量範囲ではあるが、時間外学習が不可欠な課題を課すことが一般的であり、これにより時間外学習を習慣づける雰囲気を作っている。提出された課題に対して教員がフィードバックをすることを繰り返すことで、質の高い学習になるよう努めるようにしている。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・キャリアデザイン学部改善計画 2015 中間報告書 (p.13)
- ・2019年度キャリアデザイン学部講義概要 (Web シラバス) ([https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&t\\_mode=pc&nendo=2019](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&t_mode=pc&nendo=2019))

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S  A B

**【具体的な科目名および授業形態・内容等】** ※箇条書きで記入 (取組例: PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等)。

- ・「基礎ゼミ」、「情報処理演習」、「キャリア研究調査法」(質的調査)(量的調査)では、聞いて覚えるだけでなく、実際に経験して理解することが肝要であるため、グループワークやプレゼンテーション、ディスカッション、レポート作成の機会を必ずつくることを学部の了解事項とし、1クラスの人数を制限することによって教育目的を達成するようにしている。
- ・「キャリア体験学習」(国内)(国際)、「キャリアサポート実習」「地域学習支援」「メディアリテラシー実習」では、キャリアデザインに関する基本的な知識やアプローチの方法について学び、かつ自ら研究を深める力を養うために、学外の企業、NPO、地域学習団体、高校生との協働学習を義務付けている。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度キャリアデザイン学部講義概要 (Web シラバス) ([https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&t\\_mode=pc&nendo=2019](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&t_mode=pc&nendo=2019))
- ・2019年度 体験型選択必修科目 ガイダンス資料 (3月29日)

⑤それぞれの授業形態 (講義、語学、演習・実験等) に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S  A B

**※どのような配慮が行われているかを記入。**

少人数規模であることがとりわけ重要なのは、語学 (ILAC 必修英語)、体験型授業、演習 (ゼミ) である。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

ILAC 必修英語については、28 人までを許容する運用を改善するために、2017 年度に 24 人と定員するよう申し入れを行い、2018 年度から 24 人定員が実現した。

体験型授業については、内容や授業補助者の有無に応じて上限人数を 10～50 人程度に設定している。調査法（量的・質的）も同様に、受講生を 20 名程度として多い場合には調整を行っている。

2 年秋学期開始の演習（ゼミ）については、例年、上限を 14～16 人程度に設定し、1～3 次募集を実施して、人数の平準化を図っている。

**【2018 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

語学（ILAC 必修英語）の定員を従来の「28 人」から「24 人」に減らすことにより、語学教育の効果的な展開を図った。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017 年度 第 4 回教授会（2017 年 6 月 2 日） 資料 12「教務委員会資料」及び議事録
- ・2019 年度 体験型選択必修科目 ガイダンス資料（3 月 29 日）
- ・2019 年度 ゼミ履修の手引き

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S  A B

**【確認体制および方法】** ※箇条書きで記入。

- ・進級に関する規定、早期卒業に関する規程を定めている。
- ・ Semester 毎の学部平均の GPA は教授会場で報告・検討され、講義科目における A+ の割合は、学部における申し合わせどおり、15% 以内におさめるように確認している。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・進級に関する規程（2019 年度キャリアデザイン学部履修の手引き学部（3）～（4））
- ・早期卒業に関する規程（2019 年度キャリアデザイン学部履修の手引き学部（4））
- ・2018 年度 第 5 回教授会（2018 年 6 月 15 日） 資料 4 及び議事録

②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。

S  A B

※取り組み概要を記入。

FD 推進センターによる GPA 平均の情報開示を行い、個々の教員（兼任含む）に自覚を促している。  
2013 年度まで学部主権科目の GPA 平均が他学部比べて著しく高くなっていた（平均 2.8）。この一因は、一定規模（50 人）以上の授業で、A+（15% 以上）の成績評価を出している授業科目が少なくないことにあり、該当する専任・兼任教員に A+ を 15% 以内には是正することを要請した。その結果、2014 年度以降、A+ の割合が 15% を超える科目が減少した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2018 年度 第 5 回教授会（2018 年 6 月 15 日） 資料 4 及び議事録

③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい  いいえ

※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。

- ・就職状況については、キャリアセンターから提供を受けた卒業生の進路データをもとに学部として実態を把握し、就職委員会による分析を教授会全体で共有している。
- ・就職支援についてはキャリアアドバイザーとも連携しており、進路データは適切な就職支援を行なうために、キャリアアドバイザーによる学生の進路相談にも活用している。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・キャリアデザイン学部パンフレット 2020 年度
- ・2019 年度 第 1 回 FD ミーティング（2019 年 4 月 5 日）資料 13「就職委員会」及び議事録
- ・2018 年度 第 1 回 FD ミーティング（2018 年 4 月 6 日）資料 15「キャリアアドバイザーの活動について」及び議事録

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい  いいえ

※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。

- ・成績分布、進級については、学部として実態を把握し、留年者、卒業留保者に対しては、キャリアアドバイザーによる面談を実施している。
- ・低成績取得者に対する面談も実施している。
- ・初年次必修科目のキャリアデザイン学入門について、学部事務資料に基づき留学生の単位取得が低いという事実を国際

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>交流委員会で確認し、FDで共有した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験型選択必修科目の成績評価を厳格化した結果、単位を取得できなかった学生が例年に比べて増えたという事実を体験型主任の報告によって確認し、FDで共有した。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン学部ホームページ「キャリアアドバイザー制度」  <a href="http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/adviser.html">http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/adviser.html</a></li> <li>・抽出資料及び本人宛通知（学務）</li> <li>・2018年2月22日FD資料</li> </ul>	
<p>②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験型選択必修科目の単位認定にあたっての基準を明確にし、科目間のばらつきを減らした。</li> <li>・教務委員会の主導で学部のカリキュラムツリーおよびカリキュラムマップを作成し、カリキュラムマップのなかで学部の独自性を反映した教育目標を6項目設定し、それらに対する各科目の位置づけ、到達目標を教授会等で明確に示している。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」  <a href="http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/gakka/curriculum/index.html">http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/gakka/curriculum/index.html</a></li> <li>・2018年2月22日FD資料</li> </ul>	
<p>③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験型科目（一部）におけるCareer Action Vision Testに基づく測定・評価：CAVTは、学部で開発した評価規準・方法であり、これに基づいて成果の検証を行なっている。</li> <li>・SA帰国前後の語学テスト：TOEFL-ITP（level 2）では、派遣学生10名全員がスコアを伸ばした。</li> <li>・SA帰国直後の報告会実施：学生に現地での学びや生活について英語プレゼンを行わせた。なお、参加者へのヒアリングにより、直後の語学力の向上だけでなく、例えば授業態度、発言力、思考のあり方、国際的な人的ネットワーク等へのポジティブな影響が挙げられ、広範囲な効果があることが確認された。</li> <li>・専門演習（卒業論文等）の学生研究発表会：全てのゼミ生（2・3・4年生）が参加する学部全体の発表会である。2018年度発表会は、2019年2月2日（土）に開催され、当日は9会場に分かれて各会場5～6本ずつ発表が行われた。全発表終了後には当該教室の複数の教員が講評を述べるというかたちで、評価を行なった。今年度の学生研究発表会は要旨集を電子ファイル化してweb配布という形に変更し、その分要旨の締め切りを遅くし、記述内容の洗練を図った。キャリアデザインに関わる社会現象や政策・施策等について、個人研究やグループ研究の成果が発表され、活発に質疑応答がなされており、ゼミを超えて研究を深める機会になったと評することができる。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアサポート事前指導/キャリアサポート実習成果報告書（2018年度）</li> <li>・2018年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート</li> <li>・2018年度キャリアデザイン学部学生研究発表報告要旨集</li> </ul>	
<p>④学習成果を可視化していますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門演習（卒業論文等）の研究発表会の公開および要旨集録の作成・配布</li> <li>・体験型科目（インターンシップ、国際、地域学習支援）の成果報告書作成・配布、webでの公開</li> <li>・「地域学習支援Ⅱ」「キャリア体験（国際）ベトナム」「キャリア体験（国際）台湾」の大学イベントスペースにおけるポスターセッションの実施</li> </ul>	
<p><b>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「地域学習支援Ⅱ」「キャリア体験（国際）ベトナム」「キャリア体験（国際）台湾」の大学イベントスペースにおけるポスターセッション</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

「地域学習支援Ⅱ」だけで行ってきた大学イベントスペースでのポスター展示について、「キャリア体験（国際）ベトナム」「キャリア体験（国際）台湾」も合同でポスター展示を行い、互いに実習内容や学習成果を振り返ることができるようになった。とりわけ、2018年度、新規に開設された「キャリア体験（国際）台湾」の実施状況や成果を公開したことで、新しく始まった活動とその意義について、キャリアデザイン学部だけでなく、他学部の教職員や学生、大学来訪者にも認知させることができた。この機会を通じて次年度の履修意欲が高まった1年生もおり、履修者だけに限らず、全般的に今後の学習活動に対する意欲が高まったといえる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2018年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート
- ・2018年度キャリア体験学習【国際】ベトナム報告書
- ・2018年度キャリア体験学習（国際・台湾）
- ・キャリアサポート事前指導/キャリアサポート実習成果報告書（2018年度）

1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。

①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。

S   A   B

※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

学部設置以来、2回の抜本的なカリキュラム改定を実施した。新カリキュラムの検討の際には、従来の教育課程のもとの教育成果については、常設の教務委員会のほかに臨時に教学改革委員会を設置して検証・検討を行う体制を構築している。過去2016年度には教学改革委員会を発足させて、カリキュラムの一部を見直し、2017年度からのカリキュラム改訂につなげている。マイナーなカリキュラムの改編については、教務委員会が必要に応じて実施し、教育課程の内容等の改善・向上を図っている。検証にあたっては、自己点検・質保証委員会が、執行部との連絡を密にしつつ毎年度末に各取り組み担当者からの報告をうけて点検・評価を行ったのち、教授会において改善提案するしくみを運用している。

年度始め、秋学期始め、年度終わりの年3回開催するFDミーティングにおいて、基礎ゼミ、入門授業、調査法、体験型授業などの学部の基幹的な科目の内容については、担当教員間での点検したのち、主担当教員から教授会で報告し全体で情報共有を行う。意見交換を行い次年度の授業の改善につなげる方法をとっている。年度末には、自己点検・質保証委員会が、各基幹授業についての状況を聴取し、評価している。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2018年度から実施した「キャリア体験学習（国際・台湾）」の実施状況の把握、点検
- ・「多文化社会における日本語教育」等の日本語教育関連科s目6コマ（半期）の代替科目設定
- ・100分授業の教育効果を高めるための教育方法の検討
- ・体験型科目における教育成果の可視化

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2018年度 キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート
- ・2018年度 第1回、第2回 FDミーティング 報告資料および議事録

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S    A   B

※利用方法を記入。

- ・FDミーティングにおいて、学部の基幹授業「キャリアデザイン学入門」に関して、当該アンケート結果を参考に改善点を検討した。
- ・教授会において、学部長からシステムの改善点などを説明するとともに、結果について意見交換を実施するなど、有効活用を図っている。
- ・授業改善アンケートから得られた気づきにもとづいた改善を計画し、それを次年度のシラバスに記すことを教務委員会が徹底させている。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・学生による授業改善アンケートを授業内で実施するなど、学生の回答率の上昇に努めた。
- ・各教員へのフィードバックを踏まえて、授業の改善に取り組むことを2月の教授会で確認し、周知をはかった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2018年度 キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート
- ・第7回教授会 学部長会資料・議事録（2018年度）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



・第2回FDミーティング 配布資料NO.1 (2018年9月21日)

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・学部の学習効果を高めるために効果的なカリキュラムを構築した。日本語科目の廃止及びそれに代わる科目の新設を行った。	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
・少人数科目のさらなるスクラップ・アンド・ビルドを行っていく必要がある。今年度以降、ILACの情報処理科目の見直しを行っていく必要がある。	

## 【この基準の大学評価】

### ①教育課程・教育内容に関すること (1.1)

キャリアデザイン学部では、学部の理念と目的を踏まえた教育課程の編成・実施方針に沿い、積み上げ型のカリキュラムが学年進行に沿って体系的に提供されていることが、カリキュラムマップ等からも確認できる。特に、カリキュラムマップの短文による「学習目標」の記載は学生の助けになっているものと評価できる。幅広い教養及び総合的な判断力に裏打ちされる形での、豊かな人間性を涵養するための教育課程の編成については、当学部の分野的な3つの柱とも言える、「発達・教育キャリア」・「ビジネスキャリア」・「ライフキャリア」の守備範囲が自ずと幅広いものであり、それを実践するためのカリキュラム編成により、十分に配慮されている。高大接続への取り組みについて、具体的な科目名を挙げて説明されており、中でも基礎ゼミについて、専任教員が直接指導するという原則を維持し、効果を高めようとする姿勢が窺える。国際性・職業的自立性の涵養に関しては、「キャリア体験学習（国際）」の実施が特に評価できる。

### ②教育方法に関すること (1.2)

キャリアデザイン学部の学問的守備範囲は広く、また1年次に専門科目も比較的多く配置されているという特色がある。そのような中で、学生が履修と学習を進める過程で迷いが生じることも想像されるが、2年生を対象としたゼミ履修ガイダンスを実施することで、入学1年後に再度の動機付けをした上でのゼミ配属を行っている。これは展開科目等への接続、また2年半のゼミ生としての活動となり、ミスマッチを避けるための取り組みとして評価できる。一方、全学年向けの教員・キャリアアドバイザーによる個別指導や、先輩学生による相談機会も提供されている。さらに、体験型選択必修科目が6種用意され、そのための履修ガイダンスも実施されるなど、学生への履修指導・学習指導は手厚く、学部の教育目標達成に有効な授業形態も積極的に導入されていると言える。予復習の時間確保については学生の自主性を高めるべく指導がされていることが窺える。1授業あたりの学生数についても改善がみられる。

### ③学習成果・教育改善に関すること (1.3～1.5)

キャリアデザイン学部では、成績評価・単位認定の適切性を確保するべく、進級等に関する規程の整備はもとより、GPAにおけるA+評価の占める割合については学部の申し合せに準拠しているかの確認がなされている。就職・進学状況の情報は教授会で共有され、キャリアアドバイザーにもフィードバックがなされている。低成績者に対しては面談が実施され、単位取得が比較的困難な科目とその学生数等の情報は、FD活動の一環として把握・共有されている。体験型科目（一部）で学部が開発したCAVTによる学習成果測定と評価を行っていることは、特筆に値する。SA参加者の英語力等の成果は事前・事後のテストや報告会で把握されている。卒業研究の発表会や体験型科目のポスターセッション等、学習成果の可視化や2～4年生へのフィードバックへの取り組みは、特に優れていると評価できる。教育課程に関する状況の把握と必要に応じた改善についても、適切なタイムスパンで行われていると判断できる（日本語科目の廃止と代替科目の新設）。また、学生による授業改善アンケートの組織的な活用については、教授会レベルで情報共有等がなされている。

## 2 教員・教員組織

### 【2019年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">A</span> B
<p><b>【FD活動を行うための体制】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部FDミーティングは全専任教員およびキャリアアドバイザーを含めて定例的に年3回実施しており、執行部がとり行う運営体制となっている。</li> <li>・内部自己点検・質保証委員会（構成員4名）が、執行部と距離をおき、第三者的に改善提案をする体制を構築している。</li> <li>・日常的なFD活動については教務委員会が対応している。</li> </ul> <p><b>【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部FD定例ミーティング 第1回（4月6日開催、キャリア情報ルーム、出席者28名（欠席0名、公務出張者1名） 学部長から新年度の運営方針が示された。具体的には①質保証の強化、②学部理念の共有化、③業務の効率化である。基幹科目担当者から現状と課題、各委員会から活動実績と活動計画、学部シンポジウム、キャリアアドバイザーの取り組み状況などが報告し、学部全体で課題を共有した。</li> <li>第2回（9月21日開催、キャリア情報ルーム、出席者28名（欠席0名、公務出張者1名） 学部長から年度当初の学部計画の半年後の点検と確認を行うとともに、基幹科目担当者と各委員会から、キャリアアドバイザーから中間報告を行い学部として情報を共有した。</li> <li>第3回（2月22日開催、キャリア情報ルーム、出席者25名（欠席3名、公務出張者1名）</li> <li>・内部質保証・自己点検委員会が、各担当者から自己点検チェックシートをもとに実績報告をうけ、目標達成状況と改善点の有無を確認した。</li> <li>・基幹科目担当、各委員会の1年間の活動総括を行い、学部全体で情報を共有した。</li> <li>・2018年度の中期目標・年度目標達成状況報告書について、第3回FDにおける自己点検チェックシートに基づいて執行部が作成した。それに対する評価・改善提案を内部質保証・自己点検委員会が実施し、2018年度第17回教授会（3/15開催）にて報告した。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1-3回FDミーティング配布資料および議事録</li> <li>・2018年度 内部質保証・自己点検チェックシート</li> <li>・2018年度 中期目標・年度目標達成状況報告書</li> </ul>	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">A</span> B
<ul style="list-style-type: none"> <li>・演習や体験型授業などにおいて、社会連携を積極的に進めている。</li> <li>・学生サポート助成金を設けて、学生の学外での社会貢献活動を支援する方策を講じている（毎年10件、1件あたり10-12万円の助成）。</li> <li>・法政大学キャリアデザイン学会において、研究プロジェクト助成事業を創設して、学部教員が主導する研究プロジェクトを支援している（3年間継続、年20万円の助成）。</li> <li>・法政大学キャリアデザイン学会で年6回の研究会を開催し、学部教員の研究に資すると同時に、研究会を公開し、社会還元をはかっている。</li> <li>・年1回の学部紀要の発行、年2回の法政大学キャリアデザイン学会紀要の発行により研究成果を報告する機会を設けている。</li> </ul> <p><b>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部で創設した研究プロジェクトの報告と学部シンポジウムを連携させる取り組みを今年度より開始した。</li> </ul> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・法政大学キャリアデザイン学部紀要および法政大学キャリアデザイン学会紀要</li> <li>・法政大学キャリアデザイン学会紀要 Vol.16. No.2、2019年3月。（シンポジウム報告、学生サポート助成金報告）</li> </ul>	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

特になし	
------	--

【この基準の大学評価】

キャリアデザイン学部では、全専任教員およびキャリアアドバイザーが参加するFDミーティングが執行部の運営により定期的実施されており（年3回）、日常のFD活動の集積や情報共有が全専任教員レベルで活発に行われていると言える。執行部からは独立した自己点検・質保証委員会が機能し、評価・改善提案が行われ、結果は教授会において共有されている。教員の諸活動の活性化・資質向上を図る方策としては、法政大学キャリアデザイン学会における研究プロジェクト助成事業や、年6回の研究会、紀要の発行等、かなり特色のある活動が行われている。

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	2017年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。	
	年度目標	①2018年度から実施する「キャリア体験学習（国際・台湾）」が初年度にあたることから、その実施状況の把握、点検を行う。	
	達成指標	2018年度の実施プログラムについて、執行部、国際交流委員会等がプログラムの実施状況を把握し、教授会で共有する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	「キャリア体験学習（国際・台湾）」は、春学期に事前指導を実施し、8月16日～29日の14日間に現地での実習を行った。実習にあたっては、台湾の協定校である元智大学、日本台湾教育センターに加え、現地の校友会メンバーなどの支援もあり、内容の濃いプログラムとなった。また、本年度は本プログラム実施の初年度であったことから、学部長の武石、国際交流委員長の児美川が台湾の実習に部分的に同行し、元智大学やインターンシップ企業など学生が体験実習を行う機関との連携強化を図った。秋学期には、現地研修を踏まえたポスター制作と発表、報告集のとりまとめ等により内容を共有した。プログラムの実施及び実施後の状況については、FDミーティングや教授会において適宜報告・議論をし、来年度以降のプログラム実施については、担当教員の負担軽減を図りつつ効果的な運営が行われるよう、日本台湾教育センターの協力を得て実施することで検討を進め、手続きを終了した。
		改善策	特になし
質保証委員会による点検・評価			
所見	担当教員が適切に企画を行い、実習期間において大きなトラブルなく、実施が終了したと判断できる。現地の元智大学スタッフとの関係も良好であった。法政大学当局からも適切に協力を仰ぐことができた。学生に関しては、安全に日程を終了することができ、かつ然るべき教育効果があったと考えられる。学部内の教員からの評価に関しても、次年度以降も同じ方針で進めることが承認され、一定の評価を得た。		
改善のための提言	担当教員の負担軽減に関して、対応策を講じる必要がある。今回は初年度であったため、現地に教員が同行したが、次年度以降はその必要がなくなると考えられる。ただ、同行しない分、現地のスタッフを信頼し、適切に連絡を取り合える体制を整える必要がある。また事前の学生への注意点や安全面の周知に関しても、今年度以上に行う必要がある。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
2	中期目標	2017年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。	
	年度目標	②本年度で終了する「多文化社会における日本語教育」等の日本語教育関連科目6コマ（半期）について、適切な科目設定を行う。	
	達成指標	教務委員会が振替科目の検討を行い、教授会で決定する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	理由	「多文化社会における日本語教育」(6コマ)については、受講生が少ないこと、授業の位置づけが不明確になっていることから、他の授業に振り替えることについて2017年度教授会において承認された。本年度は、これに代わる具体的な科目内容について教務委員会において検討を行い、春学期を通じて適宜教授会に提案し審議をしてきた。その結果、キャリア研究の方法論の理解を深めることを目的に、「キャリア研究調査法実習」(各領域それぞれ2コマ。領域ごとの内容は、発達教育キャリア領域では「子供研究」「恋愛研究」、ビジネスキャリア領域では「アンケート調査」「企業インタビュー調査」、ライフキャリア領域では「幸福論」「まちづくり)を新設することとし、各領域の専門性と学生のニーズを踏まえた内容が決定され、担当する教員についても決定した。なお、この検討を通じて、教務委員会においては本学部のカリキュラム全般を点検する作業を行うこととなり、授業のスリム化等にも対応して今後検討が必要な授業などが把握できた。
	改善策	特になし
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	新たに開設する予定の授業群に関して、着実に準備が進められたと判断できる。教務委員会による検討・提案の下、教授会において十二分な議論が行われた。その結果、方法論の授業が新しく開設されることとなったが、その意義は当学部にとって大きいと判断できる。従来から方法論の授業は複数開設されていたが、より高度かつ専門的な方法論を扱いたいという声は、教員・学生とも出されており、そうしたニーズに応えると期待される。
	改善のための提言	見直しが求められる科目は、これらの授業だけではなく、他分野での同様の検討に着手すべきである。情報処理分野の授業については、履修者が少なく、何かを変えていく必要性は高い。それらの科目の検討も含めて、今回の新たな授業への振替の経験を次の取り組みに生かすことが重要である。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	2017年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	③グローバル化に対応し、英語能力を有する人材育成を行う。
	達成指標	履修ガイダンスにおいて英語に関する説明を充実させ、選択型英語の受講者数を増加させる。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	4月5日に実施した1年生向け学部オリエンテーション、3月30日の2年生向けの履修ガイダンスにおいて、英語の履修に関し、担当教員から丁寧な説明を実施した。1年生に対しては、必修英語を中心にしながら大学生活における語学学習の重要性を説明し、2年生は選択英語の種類と内容を詳しく説明することにより、選択英語の履修者増加のための対応を行った。今年度の履修者は、325名(2017年度309名、2016年度263名。ただし、2017年度は2年次学生の人数が多い年度であることに留意。)となり、一定の効果を確認している。
	改善策	英語のガイダンスは引き続き丁寧に進めることとし、また様々な授業を通じて学生に語学の重要性を知らせることとする。
	質保証委員会による点検・評価	
所見	選択英語の履修者の増加に関して、適切な取組みがなされたと判断できる。オリエンテーションやガイダンスでの周知、また担当教員からの説明など、可能な限りでの学生への周知が試みられた。実際に履修者は多く、効果は確認された。 ただ、ガイダンスにおける説明の充実が、英語能力を有する人材育成に直接影響を与えるとは考えにくい。年度目標に対する達成指標の設定をもう少し検討すべきであった。	
改善のための提言	英語のレベルによるブレイクメント、クラスの少人数化などの工夫がされてきたが、未だ明らかに英語能力が向上したという状況は生まれていない。本学部においては、必修の英語授業が1年で終了するなどのカリキュラムの上で継続的に英語を学習する環境が乏しい。継続的に授業やカリキュラムによって英語強化を図るべきである。カリキュラムの考え方にまで踏み込み、本学部における各授業の位置付けを明確にしつつ、授業の質の向上に関する取り	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			組みを求めたい。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
4	中期目標	100分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。		
	年度目標	各教員の実施する教育方法について、教務委員会を中心に、各教員の取組状況を把握・FDミーティングで共有し、教育方法の改善を進める。		
	達成指標	教務委員会を中心に取り組み状況を把握し、FDミーティングで状況を共有し、改善に向けた課題検討を行う。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	年度初め（4月5日）と年度途中（9月21日）にFDミーティングを開催し、主要な授業を中心に教育方法・内容について共有を行っている。具体的には、基礎ゼミ、キャリアデザイン学入門及び領域別の入門科目（6科目）、キャリア研究調査法、体験型選択科目については、各担当者から授業の概要や実施に当たっての課題が提起され、教授会で議論を行った。受講人数が多い「キャリアデザイン学入門」に関しては、講義とワークを組み合わせ合わせた授業の工夫がなされていること、「キャリア研究調査法（質的調査）（量的調査）」に関しては2017年度に新設された「キャリア研究調査法入門」の内容を踏まえてより高度で実習を多く取り入れた授業が工夫されていること、などが紹介された。	
		改善策	教育方法の好事例の共有化など、引き続き改善に向けた取り組みを進める。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	FDミーティングにおいて、主要な科目の状況報告がなされ情報共有を行っていることは、多くの教員にとって他の授業運営を知る良い機会となっていることは評価できる。また、基礎ゼミについては、授業運営担当者を置いており、100分授業にかかわらず、科目全体をコントロールしており、科目のマネジメントができています。最低限の情報共有はできており、100分授業への移行はスムーズに行われたと判断できる。 教育方法の共有の点では、担当が全体をコントロールしている基礎ゼミ、3名の教員が共同で運営するキャリアデザイン学入門が優れたケースと認められる。	
	改善のための提言	現状、問題は見られない。ただし、基礎ゼミ、キャリアデザイン学入門以外は、最低限行うべき情報共有の範囲に止まっているようであり、改善の余地は大きい。授業の質のばらつきを縮小するためにも、教育効果の向上、教育方法の改善は学部の重要な課題である。授業の質を担保する体制の整備、授業の質のコントロールに対する積極的な取り組みを期待する。授業の質を保証するための対策を講じることも検討すべきである。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
5	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。		
	年度目標	①就職支援を充実させ、大学のキャリア支援策をリードする。		
	達成指標	学部の特色を活かし、キャリアデザインという観点から学部独自の就職支援策を実施する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	学部の就職支援活動として、①キャリアアドバイザーによる日常的な個別相談、②2年生（春）と3年生（秋）に就職活動に向けた説明会（100名以上参加）、③ゼミを中心とした全3回のOBOG 社会人の話を聞く会（それぞれ20名以上参加）、④定期的な就活支援イベント、がある。④の定期的な就活支援イベント「就活カフェ」は、夏のインターンシップの活発化を受け、2018年度は9回（前年度は5回）実施し、それぞれの会では、「夏のインターンシップを知ろう!」、「先輩の就職体験を聞こう」などのテーマを決めて実施し、各回10～30名程度の参加者となっている。2018年度の新しい試みとして、「さし飯体験プログラム」という社会人と1対1で昼食をとりながら社会経験を伺うプログラムを開始した。30社の協力、46名の学生参加があり、延べ57回のさし飯体験が行われ、学部学部 facebook page での発信や振り返り会（2回）も行った。	
		改善策	特になし	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	質保証委員会による点検・評価	
	所見	<p>就職支援については就職委員会を中心に充実した取り組みが行われている。各ゼミが主催する OBOG 社会人の話を聞く会は、ゼミ以外の学部学生も参加が可能になっており、広く開かれた仕組みが評価できる。昼休みの時間を活用した「就活カフェ」、学生が企業に出かける「さし飯体験プログラム」は、新しい取り組みとして立ち上げられたものであり、大学が行う就職支援としてのトライアルである。他学部の参考にもなりうる取り組みとして評価できる。</p> <p>キャリアアドバイザーが積極的に就職支援活動に関与していることも学部の特徴を活かしている。キャリアアドバイザー委員会で、就職支援をしっかりと業務として位置付けて組織として取り組むようにしたことで、キャリアアドバイザーが関与しやすくなっており、活動も活発化されている点が評価できる。</p>
	改善のための提言	<p>学部としての新しい取り組みが立ち上がっているが、これらを継続実施していくことが期待される。「就活カフェ」は他学部にも参考になる取り組みであると思われるが、参加者をいかに増やすかが課題である。告知方法、テーマ設定、開催時間・時期などの検討と改善に取り組むことを期待したい。</p> <p>現段階での取り組みとしては十分評価できるが、学外のイベントや取り組み、学内でもキャリアセンターの取り組みとの役割分担を明確にしていく必要がある。</p> <p>大学のキャリアセンターとの連携を強化して、学部の試みを伝える、相互補完する関係を構築することが課題である。</p>
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
6	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	②体験型科目に関しては、成果の可視化に取り組む。
	達成指標	体験型科目の成果報告集の作成、ポスターセッションの実施等により、多様な体験の内容を発表する機会を設ける。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<p>体験型科目については、それぞれの科目群ごとに成果報告集を作成しており、その内容を発表・共有する機会となっている。また、体験型科目のうち「キャリア体験（国際）」（ベトナム、台湾）と「地域学習支援」は、それぞれの科目内で複数の専任教員と兼任教員が、個別に、または連携して実習に取り組んできている。そこで、相互の活動についての理解を深めることを目的に、成果報告ポスター展示を学内のオープンスペース（外濠校舎1階）において、合同で実施した（12月）。このような成果の可視化により、相互比較しながら、体験型科目の授業の進め方や学習の様子、次年度にむけた課題等を共有することができた。</p>
	改善策	特になし
	質保証委員会による点検・評価	
	年度末報告	<p>成果報告集は情報を共有するための貴重な資料となっており、目に見える形として残されていることは評価できる。継続的に取り組まれていることも重要である。オープンスペースでの成果報告ポスター展示は、学部外にも学部の特徴的な授業を広く知ってもらう機会になっている。「キャリア体験（国際）」「地域学習支援」は、グループでの取り組みでポスターセッションとの親和性が高い。授業の特徴に応じて情報発信の方法が多様に行われていることは評価に値する。</p>
	改善のための提言	<p>今年度実施したポスターセッションの効果を明確にして、次年度の取り組みを進めることを期待したい。例えば、キャリア体験Cや多文化教育の授業はグループでの取り組みであり、ポスターセッションに馴染むはずである。ただし、授業は兼任講師が担当しており、むやみに負担を増やすことが難しい点も課題である。成果の可視化という点からは、体験型科目全体として、学生のどのような力を身につけているかを明確にすることも課題である。また、その能力を測定するなどの可視化についても、今後の対応が求められる重要な課題であると思われる。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

No	評価基準	学生の受け入れ	
7	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。	
	年度目標	①入学者の定員管理を厳格に行う。	
	達成指標	適切な水準での入学定員の充足を図る。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	入学センターとの連携を図り、入学定員の適正な水準での充足を行った。
		改善策	特になし
質保証委員会による点検・評価			
所見		他大学の入学定員の調整によって、適切な水準に合わせる事が難しくなっている状況の中で、水準を適正に保てたことは評価できる。	
改善のための提言	入学定員水準を安定化、学生の質向上には、特別入試枠と一般入試枠の定員割合が影響する。学生の質向上を担保しつつ、水準を適正化する工夫が求められる。		
No	評価基準	学生の受け入れ	
8	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。	
	年度目標	②指定校、特別入試に関して、入学者の状況を適切に判断し、制度内容等についての検討を行う。	
	達成指標	2019年度入試において実施した特別入試の制度改正の状況をフォローするとともに、指定校学生の成績を継続的に把握して、適宜見直しを行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	本年度入試より、①「キャリア体験特別入試（自己推薦）」について、募集要項において「キャリア体験」を踏まえた学部での学習意欲を重視した入試であることを明示すること、②キャリア体験特別入試（社会人）について、一定の社会人経験を踏まえた志願者とするための年齢の引き上げや出願資格を見直すこと、の改定を行った。その効果については入学後の動向を把握する必要があるものの、面接等の印象では一定の質の向上が図られたのではないかと考えられる。また、指定校については、入学者の成績等を踏まえ2019年度指定校では6校を外したが、38名の定員枠に対して43名（前年度46名）の推薦があった。地方を中心に新たに指定校とする必要性についても検討を行ったが、次年度は現行のまま実施することとした。なお、3年次編入の指定校として学部創設時から推薦を受けている新島学園短期大学については、カリキュラム改革等により3年次編入で実質的な学習をすることが難しくなっていることから、今後の対応について新島学園短期大学と話し合いを進め、今後対応を検討することとした。
		改善策	入学者の入学後の状況をフォローしつつ、継続的に検討する。特に新島学園短期大学については、同短大の学生募集にも関連することから、2019年度の早い段階で結論を出す必要がある。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	入試に関する様々な見直しは、学部として重要な判断であったが、大胆に踏み込んで改革に着手したことは高く評価できる。キャリア体験特別入試（自己推薦）の制度目的に鑑みれば、一般入試あるいは付属校、指定校推薦では採れないような、本学部にとくにふさわしいと思われる学生を入学させることが求められる。その意味では、第一歩として募集要項を見直すことには一定の効果があったと考える。指定校入試の見直しに取り組んだことは、特段、評価できる。指定校を削減するトライアルのなかで、定員枠を超える推薦実績があったことは、今年度の大きな成果である。
		改善のための提言	キャリア体験入試（自己推薦）については、募集要項の見直しだけで終わることなく、当該試験の趣旨を選考過程においても明確にできるように改善を期待したい。多様な学生を入学させるという目的に向けた制度の実質化への取り組みの継続を進めていただきたい。指定校入試については、入学後の学生の成績を確認しエビデンスに基づいた対応によって成

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			果が出たと考えられる。今後も指定校との関係性を常時見直し、緊張感のある関係を維持することを期待したい。	
No	評価基準	学生の受け入れ		
9	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。		
	年度目標	③志願者の安定的な確保に向け、学部の広報を積極的に行う。		
	達成指標	学部広報として、ゼミ紹介等の動画配信、学部シンポジウムの充実を図る。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	学部の広報委員会において、ゼミ紹介の動画配信、オープンゼミの実施などにより、学部の重要な授業であるゼミ活動の内容を高校生に伝えるよう努めている。学部全ゼミを高校生に公開するオープンゼミには、49名の参加があった。学部教育をダイジェストで伝える動画配信は12ゼミとなり、学部 YOUTUBE チャンネルの総視聴回数は、35402回となった(2019/2/16現在)。また、学部 facebook page には、21の記事投稿を実施している。学部シンポジウムでは、『選択過剰』時代のマッチングを考える～就職・採用活動の研究』をテーマに開催し150名の参加があり、学部の広報として成果をあげた。	
		改善策	本年度の志願者は昨年に比べて減少傾向となった。この背景には、昨年 T 日程、A 日程の倍率が 15 倍程度とかなり高い水準であったことが考えられる。志願者の動向について今後も適切に把握し、効果的な広報のあり方を検討する。	
		質保証委員会による点検・評価		
所見	志願者数の増減は、広報だけに影響されるものではないため、志願者数と広報の関係性だけで評価はできない。本学部の広報活動は、ここ数年、新しい企画を展開してきており、独自性と積極性について高く評価できる。とくに動画配信については、発信力も高く、高校生世代に適した情報提供ができています。ターゲットに合わせた広報ができていられる。シンポジウム自体は150名もの参加をみて成功裡に終わったものの、入学者数の確保に結びつく広報としての意味合いは薄いと考える。			
改善のための提言	様々な新しい取り組みを試みている本学部の広報活動については、教員の理解を求める必要がある。自らが積極的に広報活動を行い、入学者確保に動ける意識の共有を図ることが望まれる。 志願者の安定化には、入試制度の影響が大きいことから一概に広報だけの問題ではない。目標の再検討を求めたい。入学希望者の学部理解を深め、入学後のミスマッチを防ぎ、マッチングの適正化を図っていくことが重要である。			
No	評価基準	教員・教員組織		
10	中期目標	3つの領域の教員バランスに配慮し、教員の多様性を確保することに留意し、適切な教員の任用を行う。		
	年度目標	2018年度から専任教員が1名減となることを踏まえ、適切な教員配置について検討する。		
	達成指標	学部教育、資格課程、大学院教育における教員の配分の現状分析を執行部・教務委員会を中心にを行い、必要に応じて配分の変更について検討を進める。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	教務委員会が中心となって学部と大学院の教員配置の現状分析を行い、執行部と情報共有を行った。一方で、大学全体として人件費の見直しの提案が行われるなど、人員配置をめぐる状況が流動的な中で議論を進めるのが難しい現状もあり、継続的な検討事項とする。	
		改善策	この課題は、拙速に結論を出すべきではなく、今後の学部および大学院運営の在り方と連動させながら継続的に検討する必要がある。	
		質保証委員会による点検・評価		
所見	今年度から専任教員が1名減となった中で、執行部、教務委員を中心とし、学部のほかに大学院のみならず教職課程、資格課程への教員配置を適切に行った。新任教員のうち1名は今年度のみへの対応として担当科目が過多であったが、次年度の非常勤講師採用が決定し、配置			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。



			の適正化がなされた。	
		改善のための提言	今後も引き続き、学部執行部を中心に大学院執行部や教職課程、資格課程の担当者と連携し、教員個人々の業務負担に配慮して適切な人員配置を検討していくべきである。	
No	評価基準	学生支援		
11	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。		
	年度目標	①外国人留学生に対する支援を充実させる。		
	達成指標	留学生の課題等についての現状把握、分析を行う。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	国際交流委員会において外国人留学生の支援の在り方について検討を進めてきた。具体的には、委員会において、学部在籍する全留学生の成績状況を把握した結果とキャリアアドバイザーからのヒアリング結果を踏まえて、今後の対応の必要性を検討し、9月に実施したFDミーティングで現状の共有化を図った。その後、2018年度入学生の春学期の成績分析などを追加検討し、①「基礎ゼミ」のクラス編成における留学生対応の工夫をすること、②全学の「ラーニング・サポーター制度」を活用した留学生支援を開始すること、③原則として1年生全員が履修する「キャリアデザイン学入門」での留学生対応を要請すること、について2月のFDミーティングで議論し、今後の方向性として承認された。	
		改善策	留学生の状況把握については引き続き継続していく。	
		質保証委員会による点検・評価		
	所見	国際交流委員会の調査により、成績に関して留学生の二極化傾向が示された。「キャリアデザイン学入門」では単位を取得できない留学生が数名おり、一部の留学生が授業についていけない状況が見受けられた。 基礎ゼミのクラス編成に関しては、今年度も引き続き1クラス2名程度ずつを割り当てた。授業についていけない留学生がいた場合は、各クラスの担当教員がフォローを担当した。全学のラーニング・サポーター制度による留学生支援に関しては、教員および留学生に対し、制度の周知と活用の促進を進めた。		
	改善のための提言	留学生の成績の二極化に関しては、留学生固有の事情に起因するのか、個人の事情によるものなのかもふまえ、まずは状況の把握が必要である。 基礎ゼミのクラス編成に関しては、今後は留学生の割合が高いクラスを設置することも検討されたが、それに伴う日本人学生との交流の減少や、当該クラス日本人学生の学習への悪影響も考えられるため、今後も引き続き検討していく課題である。問題を抱える留学生がいた場合は、個別の対処のみならず、担当教員間で情報共有や、必要に応じてFDミーティング等の場で対応を考えていくことが必要である。全学のラーニング・サポーター制度による留学生支援の活用促進は今後も進めていく必要があり、その活動に関して教員への周知も進めていくことが必要である。		
No	評価基準	学生支援		
12	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。		
	年度目標	②キャリアアドバイザー制度の効果的活用を図る。		
	達成指標	キャリアアドバイザー委員会が中心となって、キャリアアドバイザーの業務内容や業務フローを整理して、より効果的な体制のあり方を検討する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	本学部で学生支援において重要な役割を担っているのがキャリアアドバイザーである。キャリアアドバイザーの活動として、従来の活動に加え、2018年度は昨年度学生の関心が特に高かった「体験型選択必修・ゼミ案内」の回数を1回から2回に増やし、就職委員会と合同で実施する就職支援活動についても新しい企画を実施した。キャリアアドバイザーの効果的活用を図るため、2018年度はキャリアアドバイザー委員長が5名のアドバイザーそれぞれから聞き取りを行い、業務分担の現状の把握、課題の洗い出しを行った。その上で、①キャリア	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		アドバイザーが行う業務の全体像及び業務フローの現状整理、②相談業務の内容について、分野に応じてキャリアアドバイザーがどのような対応をとるべきかの考え方の明確化、を行った。特に、「②相談業務」に関しては、大学内の他部門・相談機関（学生相談室など）とも情報交換を行い、これらの機関との連携のあり方について見直しを行った。これらは、キャリアアドバイザー委員会での検討を経て、FD ミーティングでも議論を行い承認された。2018年度末に2名が期間満了となりメンバーが交代することを踏まえ、2019年度の業務分担については前倒しで1月に決定し、引き継ぎ体制を整えた。	
	改善策	継続的に検討する。	
	質保証委員会による点検・評価		
	所見	長年の課題であった、アドバイザーの業務見直しが実行されたことは評価できる。相談業務において学生相談室との役割分担も明確にすることができ、本来学部として期待する業務にも十分な人員を割り当てることができたことは、見直しの成果といえる。 キャリアアドバイザー委員会が、制度活用、アドバイザーの業務について積極的かつ主体的に関与し、制度の効果的運用について実行権限を持つようになったことも評価できる。	
	改善のための提言	今後の課題は学部全体としてキャリアアドバイザーをどのように活用していくかを検討する必要がある。業務内容、業務フローの見直しによって、一部授業の支援に限られていた状況から、学部全体の支援活動へと業務範囲を広げている。学部としてキャリアアドバイザーの業務について情報共有を図るとともに理解をすすめる、名実ともに学部の特徴となるような制度にしていくことが望まれる。 ここまで進めてきた業務や体制の見直しには一定の評価はできるが、5人という少人数での業務執行をより効率的にしていけるためには、引き続き見直しを進める必要がある。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
13	中期目標	教育・研究を通じて社会貢献、社会連携を教育成果や研究成果を適切に社会に還元する。	
	年度目標	①授業を通じた社会貢献、社会連携を図る。	
	達成指標	演習や体験型授業などにおいて、社会課題をとらえた内容や方法を工夫し、社会貢献や社会連携活動を行う。	
	教授会執行部による点検・評価		
	自己評価	A	
	理由	体験型授業においては、地域のボランティア活動、高校におけるキャリア支援など、地域等の課題に対応した活動を通じて社会貢献を行っている。また、ゼミにおいても、積極的にフィールドワークを行うことによって地域貢献、社会貢献を行っている。	
	改善策	ゼミの活動などの共有を深める。	
	質保証委員会による点検・評価		
	年度末報告	所見	体験型授業での地域や企業との取り組みは、学部で継続的に行われてきたことであり、丁寧に経験を積み重ね、内容の改善が行われてきた取り組みとして高く評価できる。 本学部では、学外に出てフィールドワークを行ったり、学校や企業、NPO と連携しながら社会貢献を実践しているゼミも多く、社会貢献、社会連携活動に対する意識は高いと判断できる。
	改善のための提言	今後は、体験型授業やゼミで行っている社会・地域貢献活動については、教員間での情報共有、取り組みの拡大、そして外部への情報発信を求めたい。取り組み自体が高く評価できる一方で、一部にとどまる取り組み状況をさらに広げることも視野に入れたい。また、これらの取り組みが広く知られているとはいえず、学部内での情報共有だけでなく、広く外部に情報発信する工夫が必要と思われる。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
14	中期目標	教育・研究を通じて社会貢献、社会連携を教育成果や研究成果を適切に社会に還元する。	
	年度目標	②「人生100年のキャリア」についての社会的関心が高まる中で、キャリア研究を社会に還元する。	
	達成指標	学部シンポジウムで学部で実施してきた就職活動の研究を取り上げて課題提起をする。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	2018年11月12日に『選択過剰』時代のマッチングを考える～就職・採用活動の研究』というテーマでシンポジウムを開催した。2018年9月に経団連会長が就職活動の時期などを定めた「就活ルール」の廃止に言及したことを契機に就職・採用活動に関心が高まり、社会全体として新卒一括採用の在り方が問われ始めたこともあり、時宜を得たテーマ設定となった。シンポジウムでは、経営学、経済学、心理学の最新研究の報告が行われ、本学部からは産業・組織心理学の観点から坂爪洋美教授が登壇し研究報告を行い、また梅崎修教授がコーディネータとなりパネルディスカッションが行われた。企業人事担当者、就職情報会社、大学の就職支援者など、150人を超える参加者があり、熱心な議論がなされ、意義のあるシンポジウムとなった。
	改善策	特になし
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	学部のキャリアデザイン学会活動が活発に行われていることは高く評価できる。シンポジウムが150名もの参加を見たことは、本学部の取り組みへの関心が高いことと考えられる。キャリアデザイン学会で実施する研究助成プロジェクトは、研究成果の学外公開を義務付けており積極的に社会への還元を行なっている。 また学会のホームページを作成して、過去の論文をアーカイブして広く公開している姿勢も併せて評価できる。
改善のための提言	キャリア研究の社会還元は、シンポジウムの開催、学会HPでの研究成果の公開することで十分に貢献していると言える。今後は、さらに地域や社会と連携してシンポジウムやフォーラムを開催するなどの工夫を求めたい。地域や社会団体などとの共同研究の機会を積極的に作っていくことを今後の取り組みとして期待したい。その他、教員個人が行なっている公開授業、社会人を招聘した講演なども学部として一定の評価を与える工夫を期待する。機会を設けて情報共有を図ることも必要である。	

【重点目標】

入学定員の厳格化を踏まえ、入学経路別の学生の状況を適切に把握し、入試制度を検討する。  
また、教育課程に関しては、学部の特徴である体験型科目について、2018年度から開始する「キャリア体験：国際・台湾」のプログラムについて状況を把握することを含め、体験型科目の科目相互の情報共有・連携を図りながら、キャリアアドバイザー制度の活用を含めて効果的な展開のあり方について検討を行う。

【年度目標達成状況総括】

入試制度に関しては、指定校の見直しを行うとともに、特別入試の見直し後の状況を適宜把握し、入学者の質の確保に努めてきた。  
2018年度から開始した「キャリア体験：国際・台湾」のプログラムについては、教授会等で実施状況を確認しつつ、現地実習には学部長、国際交流委員長が部分的に同行して関係者との連携強化を図り、次年度以降のプログラムの実施についても体制を整えた。体験型科目全般について、体験型主任が中心となり、成果の共有化、科目相互の情報共有・連携を図るとともに、キャリアアドバイザーのあり方についても委員会を中心に検討を進め、体制整備を図った。

【2018年度目標の達成状況に関する大学評価】

キャリアデザイン学部におけるキャリア体験学習（国際・台湾）の計画と実施においては、教員間・各機関との綿密な連携の下で実行されている。また、参加学生の教育効果の測定と評価も適切な形で行われている。ただし、質保証委員会による改善のための提言は正鵠を射ており、新設の海外渡航科目だけに今後の適切な運営方法を慎重に検討されたい。いくつかの科目のスクラップアンドビルドについては、教授会等での十分な議論の結果、新規開講科目と内容が詰められ、実施されている。今後も引き続き学生の履修動向等を注視し改善を進められたい。2019年度入試から「キャリア体験特別入試（自己推薦・社会人）」等、特色ある入試が新たに導入されたことは評価できる。今後、入学者の追跡調査等、適切な検証とさらなる制度整備を期待したい。2018年度からの専任教員1名減に対応する教員の配置等については、適正なプロセスを踏み諸調整がなされている。学生支援の側面では、留学生の成績に二極化の傾向があることを踏まえた支援策を検討・実施しているが、今後も状況把握と支援策の検証を継続されたい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

IV 2019 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	①2018 年度から実施する「キャリア体験学習（国際・台湾）」が二年度目にあたることから、引き続きその実施状況の把握、点検を行う。
	達成指標	2019 年度の実施プログラムについて、執行部、国際交流委員会等がプログラムの実施状況を把握し、教授会で共有する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	②2018 年度で終了した「多文化社会における日本語教育」等の日本語教育関連科目 6 コマ（半期）に代わって新規に設定した科目「キャリア研究調査法実習」について、その実施状況の把握、点検を行う。
	達成指標	2019 年度から実施される科目「キャリア研究調査法実習」については、執行部、教務委員会等が実施状況を把握し、教授会で共有する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	③履修者数が少ない情報処理演習（8 コマ）の見直しに着手する。
	達成指標	検討委員会を立ち上げて情報処理系科目の内容を精査するとともに、学部としての必要性を検討し、今年度中に教授会に改善措置案を提示する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
4	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	④グローバル化に対応し、英語能力を有する人材育成を行う。
	達成指標	英語担当教員を中心に、カリキュラム、学生の学習能力向上に向けた取り組みの検討を始める。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
5	中期目標	100 分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標	各教員の実施する教育方法について、教務委員会を中心に、各教員の取組状況を把握・FD ミーティングで共有し、教育方法の改善を進める。
	達成指標	教務委員会を中心に取り組み状況を把握し、FD ミーティングで状況を共有し、改善に向けた課題、授業の質を保証するための方策を検討する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
6	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	①就職支援を充実させ、大学のキャリア支援策をリードする。
	達成指標	学部の特色を活かし、キャリアセンターとの連携を取りつつキャリアデザインという観点から学部独自の就職支援策を実施する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
7	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	②体験型科目に関しては、成果の可視化に取り組む。
	達成指標	体験型科目の成果報告集の作成、ポスターセッションの実施等により、多様な体験の内容を発表する機会を設ける。
No	評価基準	学生の受け入れ
8	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標	①入学者の定員管理を厳格に行う。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	特別入試と一般入試の入学者の割合を考慮しつつ、適切な水準の入学定員の充足を図る。
No	評価基準	学生の受け入れ
9	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標	②指定校、特別入試に関して、入学者の状況を適切に判断し、制度内容等についての検討を行う。
	達成指標	2019年度入試において実施した特別入試の制度改正の状況をフォローするとともに、指定校学生の成績を継続的に把握して、適宜見直しを行う。とくにキャリア体験（自己推薦）の試験趣旨の選考過程での明確化、指定校入試における入学後成績の分析を踏まえた指定校との緊張感ある関係づくり、さらに新島学園短大からの編入時期の変更などを行う。
No	評価基準	学生の受け入れ
10	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標	③入学希望者に対しては、アドミッションポリシーの理解を高めるために、学部としての情報発信の効果的な方法を検討する
	達成指標	学部広報として、ゼミ紹介等の動画配信をさらに増加させるとともにインターネットを活用した広報への取り組みを重点化する。また、学部シンポジウムの充実を図る。
No	評価基準	教員・教員組織
11	中期目標	3つの領域の教員バランスに配慮し、教員の多様性を確保することに留意し、適切な教員の任用を行う。
	年度目標	2018年度から専任教員が1名減となることを踏まえ、適切な教員配置について検討する。
	達成指標	学部教育、資格課程、大学院教育における教員の配分の現状分析を執行部・教務委員会を中心に行い、必要に応じて配分の変更について検討を進める。
No	評価基準	学生支援
12	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標	①外国人留学生に対する支援を充実させる。
	達成指標	「基礎ゼミ」クラス編成における工夫や「ラーニング・サポーター制度」を活用した留学生支援等を実施しつつ、留学生支援を充実させる。
No	評価基準	学生支援
13	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標	②キャリアアドバイザー制度の効果的活用を図る。
	達成指標	キャリアアドバイザー委員会が中心となって、キャリアアドバイザーの業務内容や業務フローを整理して、より効果的な体制のあり方を検討する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
14	中期目標	教育・研究を通じて社会貢献、社会連携を教育成果や研究成果を適切に社会に還元する。
	年度目標	①授業を通じた社会貢献、社会連携を図る。
	達成指標	講義科目においても、社会人の招聘を増やし、社会連携による教育をさらに充実させる。演習や体験型授業などにおいては、社会課題をとらえた内容や方法を工夫し、社会貢献や社会連携活動を行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
15	中期目標	教育・研究を通じて社会貢献、社会連携を教育成果や研究成果を適切に社会に還元する。
	年度目標	②「人生100年のキャリア」についての社会的関心が高まる中で、学部のキャリア研究成果を社会に還元する。
	達成指標	法政大学キャリアデザイン学会ホームページの充実を図る。学会紀要、学部紀要のアーカイブを進め研究成果へのアクセスの容易化を実現する。
<p><b>【重点目標】</b></p> <p>入学定員の厳格化を踏まえ、入学経路別の学生の状況を適切に把握し、入試制度を検討する。</p> <p>また、教育課程に関しては、学部の特徴である体験型科目について、2018年度から開始された「キャリア体験：国際・台湾」のプログラムについて、引き続き状況把握に注力し、体験型科目の科目相互の情報共有・連携を図りながら、とりわけキャリアアドバイザー制度の活用を含めた効果的な展開のあり方について検討を行う。</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

**【2019 年度中期・年度目標に関する大学評価】**

キャリアデザイン学部が重点目標に掲げた入学経路別の学生の状況の適切な把握を踏まえた入試制度の検討については、これまでの議論の蓄積が見られることから、着実に検証と検討を深められるのではないかとと思われる。2018 年度から実施の「キャリア体験学習（国際・台湾）」や 2019 年度から実施の「キャリア研究調査法実習」等、学部の特色ある教育課程・教育内容について、年度目標の設定は適切で、かつ具体的に記述されている。それらを含め、全体として 7 項目の評価基準に対する年度目標が 15 項目に細分化のうえ、それぞれ適切かつ具体的に記述されており、達成指標も具体的なものと言える。

**【法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況】**

特になし

**【大学評価総評】**

1 学科学部であるキャリアデザイン学部の強みとして、教員組織が小規模であることから、教員間の意見の交換や意思の疎通を図ること、諸施策の策定などが行いやすいものと推察される。したがって学部の諸施策について、機動力をもった運用をしやすい学部であるとも言え、実際、各評価基準に対する問題点の把握と様々な対応方策にそのメリットが窺える。なお、台湾を渡航先とした実習系科目の実施について、教育効果は高いものと思われるが、対応する教員の業務負担軽減への対応が今後必要になるとと思われる。教員が同行しない場合の渡航と現地での生活に関する安全面の確保については十分に留意されたい。この「キャリア体験学習（国際・台湾）」は国際性の涵養という点でも注目されるため、ウェブページ等で参加学生の感想等を発信することについても検討されたい。また、学部のウェブサイトで公開されているカリキュラムツリーの閲覧性の高さ（〇〇A、〇〇B などの、集約しても差し支えない科目を集約して記載している点）や、カリキュラムマップに示されている短文による講義概要の記載等は、よく工夫されている。このように、キャリアデザイン学部の取り組みには他学部でも参考になるものが見られ、評価できる。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基礎的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。